

## 近世前期藩政史料に関する覚書

——「藩庁日記」等と「津輕家御定書」との史料学的比較検討——

長谷川 成一

はじめに

最近の近世史研究にあつては、各自治体史の編纂過程において新史料の発掘が盛んになされ、さらには近世史料を収録した史料集が相次いで刊行されており、それ自体は学界に共有の財産を増やすという意味からすれば、真に喜ぶべきことである。しかしなかには解題があまりにも簡単な記述に終始しているため、史料学的な位置付けがよく分からないものも存在する。<sup>(1)</sup> そのような現状を打開する観点からも、今後藩政史料も含めた近世史料全体に根本的な検討を加えることが、必要になつてこよう。本稿は右に述べた問題関心に基づき、それを解決する基礎作業の一環として執筆した次第であり、これによつて今後の藩政史研究並びに北奥近世史研究の進展にいささかの貢献をすることができれば幸いと考へている。

さて従来の津輕藩藩政史研究のなかで、全国的にみても有数の、かつまた膨大な量を誇る同藩の藩政史料に対する史料学的な研究の端緒が開かれたのは、つい最近のことである。<sup>(2)</sup>

ここで主たる対象として取りあげる「津輕家御定書」(以後、御定書と略記する)は、近世前期津輕藩の政治、経

済、農業などの各分野を研究する上で貴重な史料であることは、改めて強調するまでもないことであろう。しかしこのような重要史料であるにもかかわらず、この御定書について本格的な解題と呼べるようなものは、今までほとんど見当たらなかった。

本稿では、御定書の全体的な把握をめざすことを目的としつつ、近世前期津軽藩の主要な史料の一つである当該史料を藩政史料全体の中にいかに位置付けるのか、加えて御定書からみた当時の藩政史料、例えば「弘前藩庁日記」（以後、国元の日記は「国日記」、江戸屋敷のそれは「江戸日記」と略記する）はいかに評価されるのか、などの問題点を念頭において、考察を進めて行きたい。

# 一、「津軽家御定書」解題の史料学的問題点

先年、史料館叢書3として『津軽家御定書』（東京大学出版会 一九八一年 以後、本書を『御定書』と略記する）が刊行されたことは、津軽藩研究に携るものとしては喜びに耐えないものであった。それ以前に当該御定書について触れたものとしては、『弘前図書館蔵郷土史文献解題』（弘前図書館 一九七〇年）のほかには、蝦名庸二「弘前藩『御定書』に関する一考察」（『弘前大学国史研究』 第四七号 一九六七年）、黒滝十二郎「津軽藩『御定書』の成立とその意義」（『弘前大学国史研究』 第六〇号 一九七三年）があるにすぎず、また史料館叢書3に掲載された、浅井潤子氏の執筆にかかる解題（以後、同氏の解題を『御定書解題』と略記する）は右の研究論文を大幅に継承した集大成とも見なしえる充実したものであった。その反面この『御定書解題』には、いろいろな問題点も同時に引継がれたことは、否定できない事実である。以上述べた事柄は何も御定書に限ったことではなく、これは津軽藩藩政史研究もし

くは北奥近世史研究の弱点を露呈したもので、具体的には史料学的ないし古文書学的な研究が、他地域と比較してきわめて蓄積が少ないということに由来するものと考えられる。それについては今後の研究課題として、これ以上つけくわえることはしない。ここでは御定書に関する各論文ならびに解題の問題点を、次に掲げることにする。

御定書についての先駆的研究である蝦名論文は、この御定書は日記役のもとで諸法令を「御用格」に整理する前の段階で、寛文四年（一六六四）から延宝三年（一六七五）までのものを年次を追って収録した当時の行政法令集と定義づけた。この定義は最近に至るまで、その有効性を保持しつづけており、これ以降、御定書についての共通した理解として認識されてきた。

黒滝論文は、御定書成立以前の法令と御定書との関連を藩士・町人法度、農民法度との関係に中心をおいた論稿であって、御定書自体の内容を直接吟味したものではない。

『御定書解題』は、基本的には蝦名論文における前述の定義を踏襲したものでありながら、幾つかの点で検討を要する箇所が存在した。第一に、「御定法編年録」（弘前図書館蔵）が御定書と同種類の史料であると言及していること、加えて当該史料を個人の手で諸法令を集めたものとしている点も即座に首肯できないところである。第二に、御定書が日記役のもとで既出の諸法令を「御用格」として整理する前段階として編写されたという点（蝦名論文を、主に踏襲した点である）、第三に、御定書が最も完備した法典であるとしたこと、以上三点にわたる問題点を指摘できよう。第二の点に関しては、まさに本稿においてこれから論じる主要なテーマであるので、以下の章にあって述べるが、第一と第三の問題点に関しては、筆者が『史学雑誌』第九十編第八号（一九八一年）の新刊紹介において既に誤解に基づいた記述であることを指摘しておいた<sup>（4）</sup>ので、是非参照していただきたい。

なお蝦名論文とその定義を踏襲した『御定書解題』との間で、微妙な食い違いが見受けられる。これは一見小さい

ようにみえるものの、内容に大きな変更を来たものであるので一言しておく必要がある。蝦名論文は、諸法令を御用格に整理した前段階のものが御定書であると記している。一方の『御定書解題』は、諸法令を御用格として整理する前段階と記しており、ここにかんがりの隔たりが存在することは一目瞭然であって、この論点に従うならば、御定書Ⅱ御用格という図式になりかねないことになり、これは事実と反する。従って蝦名論文のほうが、どちらかといえば正確でなくとも実態に近い解釈である。

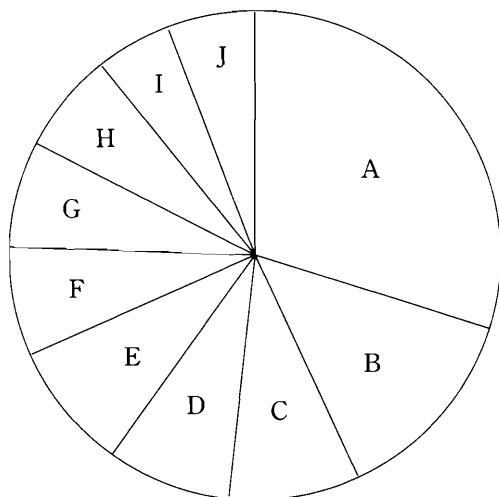
## 二、津輕家御定書の全体構成について

本章では、従来漠然と訓令や行政法令を集大成したものとわかれてきた御定書について、改めてその構成を再検討し、全体像の把握を試みることにしたい。その際に用いる御定書の史料テキストは、『御定書』に収載されたものであり、それ以外の文書ではないことをあらかじめお断わりしておく。

『御定書』は三部からなり、第一部は国元の御定書一八九通（寛文四〇延宝三年）、第二部は、江戸御屋鋪中御定書二七通（寛文二〇延宝二年）・江戸御定書并御覧書五八通（延宝八年）、第三部は、御条目・御印諸式・弘前中往来之面々召連候人数之覚・御法度之覚・諸法度・家訓・御門出入御定書・江戸御屋鋪御定書・諸式要集（寛文元〇貞享五年）を収録してある。これらのなかで本稿にて検討の対象とするのは、主に第一部と第二部の御定書である。

第一部の寛文四年から延宝三年までの国元の御定書一八九通を宛先や内容を勘案して、筆者は次のような分類項目を設定した。勤方（城中・番所・門番・留守中など）、浦方、山方、勘定方、蔵方、郡方、町方、職人、小知行、鷹方、茂合、その他（風儀規制、寺社方、敦賀上乗りなど）である。このような分類項目が妥当であるか否かは別とし

御定書の分類項目別比率



御定書	数値	比率
A	58	29.9%
B	25	12.9%
C	19	9.8%
D	17	8.8%
E	16	8.2%
F	14	7.2%
G	14	7.2%
H	13	6.7%
I	8	4.1%
J	4	2.1%
勘定方	3	1.5%
浦方	3	1.5%
山方		
蔵郡		
その他		
町職茂		
小知行		
鷹方		

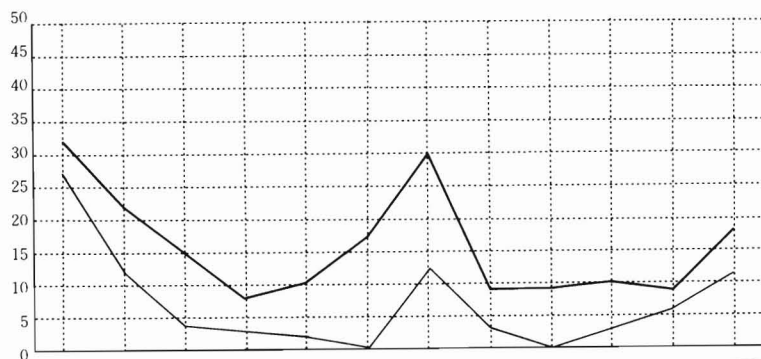
て、たとえば町方や勘定方には双方連名の宛名にて発給される御定書も多々見受けられ、逆に分類不可能なものも存在するので、分類に従って通数を数えた場合、収録してある御定書と総数が相違することがありえる。したがって上に示す分類作業の結果は、国元御定書における内容の傾向を単に表示したものと受止めていただきたい。また国元御定書の年次構成、すなわち発給された年

にいかなる偏りがあるかについても触れておくことにする。

さて勤方からその他の12項目にしたがって分類した、国元御定書の分類比率は上のような円グラフ「御定書の分類項目別比率」にみられる割合を示した。勤方に関するものが約三割と、他の項目に比較して圧倒的な分量を示しており、当時期における津輕藩の藩政がいかなる政策に重点を置いた施政を実施しようとしていたのかを看取できよう。また山方・勘定方・郡方・蔵方をあわせると66%となり、年貢、諸役、運上の収取などいわゆる藩財政にかかわる部門の御定書も頻繁に発給されたことを示している。なお浦方に関する御定書は、船舶の領内湊津への出入りの監視ならびに津留、出入りに関する銀の徴収にかかわるものが多く、右の藩財政に所属する分類項目のなかに括るのも可能である。町

A グラフ 御定書と国日記との年次構成の比較

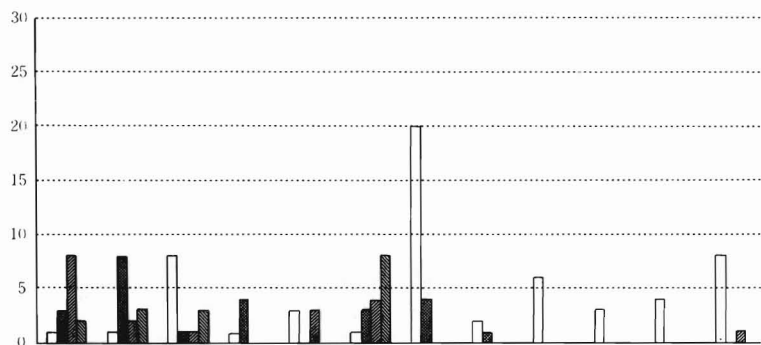
単位：



	寛文4	寛文5	寛文6	寛文7	寛文8	寛文9	寛文10	寛文11	寛文12	延宝元	延宝2	延宝3
— 御定書	32	22	15	8	10	17	30	9	9	10	9	18
- - 国日記	27	12	4	3	2	0	13	3	0	3	6	11

単位：

B グラフ 御定書の主要部門の発給状況



	寛文4	寛文5	寛文6	寛文7	寛文8	寛文9	寛文10	寛文11	寛文12	延宝元	延宝2	延宝3
□ 勤方	1	1	8	1	3	1	20	2	6	3	4	8
■ 浦方	3	8	1	4	0	3	4	1	0	0	0	0
■ 山方	8	2	1	0	3	4	0	0	0	0	0	1
■ 勘定方	2	3	3	0	0	8	0	0	0	0	0	0

方も、麴役、居鯖役などの徴収にかかわるものが散見し、また町支配に関するいろいろな取り決め、例えば町役人の職掌に関するものなどの規定が定められている。国元の場合は右にみたごとくさまざまの傾向を示しているが、江戸屋敷の御定書にあっては、ほとんどが屋敷内の勤方に関するものである。(5) これは当然と  
 言え、当然であって、主に上屋敷における

御定書が多いことから、この時期に勤方の大要が徐々に確定していったのであろう。

次に国元の御定書の発給年次を検討する。寛文四年から延宝三年までの御定書の発給の状態を折線グラフにしたのが、「御定書と国日記との年次構成の比較」(Aグラフ)である。本章では、御定書のみをとりあえず検討の対象とし、「国日記」との比較については第三章で触れることにしたい。寛文四年、寛文十年、延宝三年が各々ピークを構成しており、この三期間の発給が特に多かったことがわかる。寛文十年の発給が特に目立つのは、前年の寛文蝦夷蜂起事件(シャクシャインの乱)の後、津軽藩にあつても北狄の備えとして藩体制の整備を余儀なくされたものと考えられる<sup>(6)</sup>。それは、「御定書の主要部門の発給状況」(Bグラフ)のグラフを参照していただければ理解可能と思われるが、同年は、勤方に関する御定書の発給がほかの年に比べて群を抜く発給件数であつた。Aグラフの寛文十年のピークは、実は勤方の二〇通が主たる構成であつて、この時に津軽藩がその家臣団の勤方ならびに藩体制の整備をいかに急いでいたか、これらのグラフは示しているよう。また逆に、前年の蝦夷地への出兵ないし出兵体制を敷くことによって、領内に擬似戦争状態を作り出した結果、家臣団に緊張状態を強制し、これらの勤方に関する規制を一挙に浸透しやすくなったとも考えられる<sup>(7)</sup>。

Bグラフによると、寛文四く九年までの期間に浦方、山方、勘定方の御定書は大方発給されているようで、寛文十年を境に御定書は概ね勤方を主体とした内容になってゆく傾向が認められる。また蔵方の場合、寛文四年に大方の御定書が出された後、ほとんど出ていないものもあり、それとは対照的に町方では、延宝期に入つて御定書が多く発給されたものもある。町方の場合、延宝期に城下弘前の整備<sup>(8)</sup>、九浦町方支配の形成が進んだことがこの背景にあると考えられる。

以上の指摘から、御定書については次のようにまとめることが可能であらう。江戸屋敷の御定書は、上屋敷の勤方

に關するものが大部分を占め、藩主の在府中の勤方、留守中の勤方などの詳細が決められた。国元の御定書にあっては、発給の時期的なピークが三回あり、なかでも寛文十年のそれは、寛文蝦夷蜂起事件後の藩体制の引締め、家臣団統制の確立を念頭に置いた施策の一環として、特に勤方に関する御定書の発給が多かった。次に藩財政にかかわる勘定方、山方、浦方、蔵方などの御定書は、概ね寛文四〇九年までの期間に発給され、四代藩主津輕信政の領内統治、經濟政策が着実に実行に移されたことが知られる。総じて、当時期の御定書については、約三分の一を占める勤方(家臣団の服務規則)を基底としつつ、領内藩財政に関わる、さまざまな分野における収奪機構を形成せんと意図した御定書を収録したものと規定できよう。

### 三、御定書と記録・編纂史料との比較

本章は、御定書の史料的な性格を見きわめるため当時の記録や編纂史料に如何なる形で御定書が出てくるのか、加えてそれと如何なる関係をもつのか、次に掲げる史料と比較対照することにした。これは「御定書解題」において言及されているような事実があるのかなどの点を、見きわめようとする意図に基づいている。比較対照する史料は、「国日記」、「江戸日記」、「御用格」、「御定法編年録」、「御定法古格」、「封内事実秘苑」で、「御定法編年録」と「御定法古格」は津輕藩の代表的な法制法令集であるという理由に基づき、「封内事実秘苑」は藩政時代に編纂された代表的な編纂史料ということで(明治維新後、編纂された津輕氏の正史「津輕歴代記類」も「工藤家記」の名前で「封内事実秘苑」を数多く引用している)対象として選定した。なお断るまでもなく、これらの史料は全て弘前図書館の所蔵にかかるものである。



各史料との対比検討の前に、御定書自体が各史料のなかにどれほど含まれているのか、その比率を確認しておきたい。その場合、第1表「御定書と各史料との対比」を参照していただきたい。御定書が全文または関係記事として載せられているものを含めたものとして、「国日記」には八三通44%がなんらかの形で掲載され、「御用格」には一四通7%、「御定法編年録」には五通2%、「封内事実秘苑」には六通3%と、「国日記」は他と比較して御定書を収録している率が圧倒的に高く、両者の関連性はきわめて高いことが知られる（「江戸日記」は、これらと比較にならないので別にする）。内容・細部にわたる関連については、各史料の検討のなかで言及したい。

### ①「国日記」との比較

右にみたように御定書の44%が、全文もしくは関係記事として「国日記」のなかに確認される（第1表のA主として国日記との比較を参照のこと）。ただし全文掲載はわずか一五通に過ぎず、あとの六八通が関係記事として確認され、まったく「国日記」のなかにみえないのは、一〇六通であった。また全文掲載が多いのは寛文四年であって、ただし同年においても二一通は関係記事に過ぎず、全文掲載と関係記事の間にはその掲載基準ないし選別基準は取り立ててないように思われる。収録の年次構成は、前章にあつてみたように寛文四年・寛文十年・延宝三年の三つの類似したピークを形づくっており、その点からも御定書と「国日記」とは関連性が高いと言える。

内容においては、これも両者は同様の傾向を示している。具体的には寛文四年の場合、蔵方、山方、浦方などが多く次第に勤方に関するものが多くなつてゆくが、「国日記」も同様であつた。ただし「国日記」寛文九年にあつては、例外であり、御定書には同年の勤方の関係御定書が八通発給されているにもかかわらず、「国日記」には全く登載されていない。これはおそらく同年の寛文蝦夷蜂起事件によつて、その関係記事が頻出したことに起因すると考えられよ



帳」とは別物であるのと同時に、「国日記」と御定書は各々独立したセクションでしかも別々の過程を経て成立したと見なしえるのであって、「国日記」の記録以前に御定書を収録した「大帳」は存在したのであった。「国日記」との詳細な比較と考察は、次章にておこなうのでそれに譲りたい。

(B 主として江戸日記との比較)

御定書番号	⑤	②	③	④
1			○	
2				
3				
4				
5	○			
6				
7				
8				
9				
10	△			
11	△			
12	△			
13	△			
14	△			
15	△			
16	△			
17				
18				
19				
20				
21				
22				
23	△			
24	△			
25	△			
26	△			
27	△			

(C 御条目との比較)

御条目番号	①	②	③	⑤
1				
2	○		○	
3				
4	△			
5				
6	△			
7				
8				
9				
10				△
11	△			

\*各記号は①国日記、②御用格、③御定法編年録（御定法古格を含む）、④封内事実秘苑、⑤江戸日記である。また、○印は、御定書全文を掲載していることを示し、△印は、御定書の関係記事を掲載していることをあらわしている。

定書は「大帳」と称する帳面に別に登載されていた可能性が高い。すなわち寛文期津輕藩の日記方では、日記の記載に際してその「大帳」を参照し、ついでそのなかから必要な条書類を適宜選択して記録したのであった。しかし寛文五年をすぎる頃から全文掲載がほとんど見られなくなる。それと軌を一にして「大帳二有」の記述が見えなくなり、同藩の日記方では発令された御定書を直接閲覧する機会が多くなって、いちはやく「国日記」に関係記事として、御定書の発令を登載するようになっていったと推察される。この「大帳」とは、現在残存していないことから如何なる史料であったのか判然としない。しかし日記方の役人は、この「大帳」をみて御定書を「国日記」に掲載したのであり、御定書自体がこの「大帳」に記載されていたのであろう。それゆえ「国日記」とこの御定書を登載してあった「大

## ② 「御用格」との比較

「御用格」はわずか一四通7%の御定書を掲載しているにすぎないものの、「国日記」を除いた他の史料と比較すると(第1表を参照のこと)、多いほうである。史料の性格上、「国日記」と違って御定書全文を掲載しているのが特徴と見なしえる。この一四通の内六通の御定書が「国日記」には見えないもので、「国日記」をジャンル別に書き抜いたものとする「御用格」の定義は修正の必要があろう。すなわち御定書とのかかわりにおいて言うならば、「国日記」にもない御定書を「御用格」が掲載してあることは、「御用格」が単なる「国日記」の書き抜きとばかりはいえない独自の性質を持つ史料であるからと考えられる。

内容に関しては、蔵方、浦方、鷹方、勤方、駒改等で、これもあまり一定の方針のもとに「御用格」のなかに御定書を収録したとはいえないようである。

「御用格」の成立は、寛政本の場合、寛政四年頃と推定されており、前述した「大帳」の存在を勘案するならば御定書と成立年は相違していることから、基本的には御定書の成立との関係は薄いと考えるのが常識的であろう。しかし「御用格」編纂にあたって「国日記」に関係記事しか見当たらないものを「御用格」に収録していることからして、「御用格」の編者は、なんらかの形をもつて利用可能な状態にあつた御定書を参照して、「御用格」にそれを盛り込んだことはまず間違いないであろう。

## ③ 「御定法編年録」・「御定法古格」との比較

「封内事実秘苑」と同様五通を収録するに過ぎず、御定書との関連は稀薄であるといえる(第1表を参照のこと)。従来、「御定法編年録」等は御定書と同種類のものとされてきた経緯があつたが、それはかなり無理があると言わなく

てはならない。内容については、郡方、勘定方、浦方、勤方、町方等、「封内事実秘苑」と重なりあうものが多く、その点で注目される程度である。

#### ④ 「封内事実秘苑」との比較

江戸屋敷の御定書を収めているのは一通もなく、また御定書も収録したものが極めて少ない(第1表を参照のこと)。それも全文を掲載せず、関係記事にとどまっている。内容に関しては、蔵方、勤方、勘定方、浦方、町方などこれらのなかにはお互いに関連するものはなく、むしろ「封内事実秘苑」の編者が重要と考えた歴史事象に関連して御定書に触れたという感じが強い。また、「封内事実秘苑」に五通しか御定書が入っていないのは、この編者が必ずしも御定書を同書における編纂の基本史料として、かつまた換言すれば拠るべき典拠として考えていなかったことによるのではなからうか。しかし、「封内事実秘苑」の成立は文政年間頃といわれており、「国日記」には見えず同史料に収められている、第九・八八号の御定書などは恐らく御定書自体を参照した可能性が強いと考えられる。

このような各問題を勘案した場合、やはり「封内事実秘苑」における史料的な限界は自ずから明らかになったわけで、代表的なものとはいえ編纂史料の利用にはとくに注意を要するとともに、やはりこれらの史料はインデックス的な使い方に限定して用いるべきなのであろうと思われる。

#### ⑤ 「江戸日記」との比較

『御定書』の第二部を構成する津軽藩江戸屋敷の御定書に関しては、寛文八年から書きはじめた「江戸日記」において、寛文十二年が七件、延宝三年が五件と数も少なく、御定書の全文を掲載したものは全くなかった(第1表B主

として江戸日記との比較を参照のこと。「江戸日記」は、本来的に記事内容が簡単であるという制約もあり、これは致し方のないところであろう。

ところで御定書、「国日記」、「御用格」、「御定法編年録」、「封内事実秘苑」の五者がすべて全文であれ関係記事であれ収録しているのは、『御定書』一七二号の延宝三年正月晦日の御用勤方日記・記録方御定書もしくは関係記事である。これは日記役創設を画期的な事柄であると認識したことによるのであり、後の法令集である「御定法編年録」の編者もあるいは日記方に所属した人物であった可能性が強いと考えられる。

#### 四、「国日記」と御定書

前章にて、「国日記」のほか「御用格」・「御定法編年録」・「御定法古格」・「封内事実秘苑」との比較対照をおこなった。各史料と御定書との関連を検討した。そのなかで「国日記」がもつとも御定書と関係する部分が多いことが確認された。Aグラフにみるように、「御定書」と「国日記」に掲載されている御定書との年次構成および分布は、類似したピークと上下の線を描いてほぼ同様の傾向を示しており、この点からも両者の相関関係はいちじるしく高いものがあると考えられる。そこで本章では、「国日記」のなかに御定書が、実際には如何なる形で出てくるのか、その内容を次に掲げることによって検討の素材とすることにしたい。御定書全文が「国日記」に掲載されている場合は、例えば第1表の御定書と各史料との比較に見えるように一五・七号の御定書は、この対比から割愛した。参考のために「国日記」のみならず、「江戸日記」・「御条目」についても「国日記」との対比をあげておいた。

なお、「国日記」との対比においては、御定書の番号・文書名・宛先は『御定書』第一部所収の目次を使用した。同

様に「江戸日記」とのそれは、『御定書』第二部「江戸御屋鋪中御定書」、「御条目」とのそれは『御定書』第三部「御条目」の各目次を用いた。また「国日記」のほか参考のため、「封内事実秘苑」にも関係する記事がみえた場合には、「国日記」のあとに掲げておいた。傍註の（ ）は、全て筆者の註記である。

### 「国日記」との対比

九 寛文四年九月二十一日 定 (御年貢納所之儀) 御代官所宛

〔国日記〕寛文四年九月二十一日の条

御寄合御代官へ献立之書付渡之、

一、肴物一種 汁大こな

一、あへ物取合 食

一、酒一切出申間敷候、

下

一、塩いなし一種 汁大こな

食

在々ニて指紙を以御賄被下衆中不寄誰ニ右書付之通賄可申付候、肴之儀遠方へ調ニ遣間敷候、近所ニ而有合之輕き肴たるへし、右之旨肝煎并御百姓共ニ急度可被申渡候、違背之百姓有之ハ可為非分物也、

〔封内事実秘苑〕(寛文四年) 九月二十一日の条

御代官江被仰渡之趣

一、肴物一種 一、あゑ物取合 汁食 一、酒ハ一切出シ申間敷、一、下部ハ塩鰯一種 汁食  
右之通、在々ニ而差紙を以御賄被下候者誰々ニ不寄右之通可被申付候、肴之義遠方江調ニ遣間敷、近処にて有合  
肴可差出、此旨肝煎ニ急度可申渡旨被仰付候、

第九号の本御定書の第一六条にある、

一、在々にて差紙出之御賄被下之衆中、別紙に出之書付之通、上ハ一汁二菜下ハ一汁壹菜に、酒之儀は一切可為  
無用事、

の条文のみが、他史料に見えるものである。

一一 寛文四年十一月朔日 定 (材木請払等取扱方之儀) 中師御山奉行宛

〔国日記〕 寛文四年十一月二日の条

一、中師ニ而御材木請払之ケ条書二通、竹内長右衛門・森山弥七郎ニ申渡ス、

一三 寛文四年十一月六日 定 (御城米取扱方之儀) 鯨ヶ沢・十三御蔵奉行宛

〔国日記〕 寛文四年十一月六日の条

一、鯨ヶ沢御蔵ニて御城米請払之次第ケ条書、油布猪左衛門・牧只右衛門一通渡ス、但ひかへ有、

一、十三御蔵ニて同断之ケ条書一通、成田伝兵衛・手塚四郎兵衛・沢田六左衛門ニ渡ス、但ひかへ有、

一四 寛文四年十一月六日 定 (御城米取扱方之儀) 三世寺御蔵奉行宛



〔国日記〕寛文四年十一月六日の条

一、三世寺御蔵ニて右同断之ケ条書一通、天内善兵衛・成田忠右衛門渡ス、但ひかへ有、勿論ケ条書式通入念御蔵奉行可仕由渡ス、此御横目に沼田七郎兵衛・長尾五右衛門申付候、

一五 寛文四年十一月六日 定 (御城米取扱方之儀) 板屋野木御蔵奉行宛

〔国日記〕寛文四年十一月六日の条

一、木村喜之助・伴林之丞、板屋野御蔵奉行可仕由渡ス、則御米請払之次第ケ条書一通渡ス、但ひかへ有、

一六 寛文四年十一月六日 定 (弘前御米蔵請払之儀) 弘前御米蔵奉行宛

〔国日記〕寛文四年十一月六日の条

一、阿部五左衛門・山口弥次右衛門儀、弘前御米蔵預り可申由申渡ス、是又御米請払之ケ条書一通渡ス、但ひかへ有、此御横目石郷岡善左衛門・原子弥右衛門申付候、右之御蔵奉行桜庭久右衛門・樋口理右衛門赦免ニ申付候間、勿論御勘定仕切可被申由申渡ス、

一七 寛文四年十一月六日 定 (御蔵入糶請払方ニ付) 弘前糶御蔵奉行宛

〔国日記〕寛文四年十一月六日の条

一、三上儀左衛門・葛西十左衛門、糶御蔵預り可申由申渡ス、則請払之ケ条書一通渡ス、但ひかへ有、此御横目二岩井八右衛門申付候、右之糶御蔵預り候柿崎源助・木村猪兵衛儀ハ、右兩人を代ニ申付候間、各御勘定仕切

可被申由申渡ス、

一八 寛文四年十一月六日 定 (酒麴役米改方ニ付) 酒麴御役米蔵奉行宛

〔国日記〕 寛文四年十一月六日の条

一、酒麴御役米蔵奉行新屋茂右衛門代ニ高田平右衛門申付候、則八木橋六左衛門と兩人ニ而可被仕由申渡、請払之ケ条書一通渡ス、但ひかへ有之、新屋茂右衛門儀赦免ニ申付候間、御勘定仕切可申由申渡ス、

二〇 寛文四年十一月六日 定 (外浜山入方ニ付) 外浜御山廻衆宛

〔国日記〕 寛文四年十一月六日の条

一、外浜山ニて家材木并雜木伐ニ山入仕立共方より御役銀取申儀、委細書付外浜山廻齋藤平内兵衛ニ渡ス、但ひかへ有、

二一 寛文四年十一月六日 定 (外浜山入方ニ付) 外浜御代官衆宛

〔国日記〕 寛文四年十一月六日の条

一、同所ノ山ニ而右同材木共取山入之者共各より向後御折紙出し、山入仕せ、人足壹人ニ付御役次銀ニて式匁宛請取可申由、委細書付、外浜御代官へ渡ス、ひかへ有、

二二 寛文四年十二月六日 定 (塗師勤方ニ付) 塗師御細工所奉行宛

〔国日記〕寛文四年十二月二日の条

一、塗師御細工之品之ケ条書（一脱カ）通、村山六兵衛・須藤助左衛門渡ス、ひかへ有、

二三 寛文四年十二月六日 定 （諸職人御賄米請払ニ付） 諸職人御賄奉行宛

〔国日記〕寛文四年十二月二日の条

一、諸職人賄方并供物之次第ケ条書一通、清野九兵衛・新屋甚右衛門渡ス、ひかへ有、

二四 寛文四年十二月六日 定 （御台所御賄米請払ニ付） 神金左衛門宛

〔国日記〕寛文四年十二月二日の条

一、御台所ニて万請払之次第ケ条書一通、神金左衛門渡ス、ひかへ有、

二五 寛文四年十二月十六日 定 （今別諸材木仕出并請払之儀） 今別御山奉行宛

〔国日記〕寛文四年十二月十六日の条

一、斎藤平左衛門・奈良岡権右衛門・山上定右衛門方へ今別御材木請払之ケ条書二通渡ス、ひかへ有、

二六 寛文四年十二月十六日 定 （十三出材木仕出方ニ付） 十三御山奉行宛

〔国日記〕寛文四年十二月二十四日の条

一、成田伝兵衛・手塚四郎兵衛・沢田六左衛門方へ十三御材木請払之ケ条書二通渡ス、ひかへ有、

二七 寛文四年十二月十六日 定 (弘前廻御用材木請払之儀) 弘前御材木奉行宛

(国日記) 寛文四年十二月二十四日の条

一、後藤十右衛門・太田左藤左衛門方へ弘前御材木請払之ケ条書一通渡ス、ひかへ有、

二八 寛文四年十二月十六日 定 (居鯖御役銀請払取締方ニ付) 居鯖御役銀御催促奉行宛

(国日記) 寛文四年十二月二十四日の条

一、角田市右衛門・鈴木与三兵衛方へ居鯖御役銀催促之ケ条書一通渡ス、ひかへ有、

二九 寛文四年十二月十六日 定 (鍛冶細工勤方ニ付) 鍛冶御細工所奉行宛

(国日記) 寛文四年十二月二十四日の条

一、坂本市郎右衛門方へ鍛冶御細工吟味之ケ条書一通渡ス、ひかへ有、

三〇 寛文四年十二月十六日 定 (御家中衆御借方ニ付) 金銀御借方御催促奉行宛

(国日記) 寛文四年十二月二十四日の条

一、小田桐善左衛門・且代三郎左衛門方へ金銀米御借方催促之ケ条書一通渡ス、ひかへ有、

三一 寛文四年十二月十六日 定 (御鳥屋場支配方之儀) 御鳥屋廻奉行宛

(国日記) 寛文四年十二月二十四日の条

一、渋谷平右衛門・早川勘介・鳴海九右衛門方へ御烏屋吟味之ケ条書一通渡ス、ひかへ、

三二 寛文四年十二月十六日 定 (御城中御用疊仕立方ニ付) 御疊屋与兵衛宛

(国日記) 寛文四年十二月二十四日の条

一、御疊屋与兵衛方へ御疊さゝセ候吟味之ケ条書二通渡ス、ひかへ有、

三四 寛文五年二月二十六日 覚 (杵・樽極印ニ付) 篠村四五右衛門宛

(国日記) 寛文五年三月七日の条

一、御国中升樽之極印打ニ笹村四郎右衛門申付、誓紙仕せ申渡ル、但ケ条書一通相渡ス、

三五 寛文五年三月六日 覚 (間役・面役銀取立方之儀) 十三沖之口御横目衆宛

(国日記) 寛文五年三月九日の条

一、十三沖御横目宮館儀右衛門・森内与三右衛門方へ御役改様之ケ条書一通渡ス、

なお、三月十二日の三六号御定書は三五号と同様、十三沖之口御横目衆に宛たものであるが、そのなかに、「先日之ケ条に書落候付如此候、」とあるので、三五号の補完的な文書とみなしえるであろう。

三七 寛文五年三月十二日 覚 (鯨ヶ沢御蔵米請払ニ付) 斎藤孫左衛門・清野与左衛門宛

(国日記) 寛文五年三月十二日の条

一、斎藤孫左衛門・清野与左衛門鯁ケ沢御蔵御横目申渡、誓紙申付、則ケ条書一通渡ス、

四一 寛文五年三月二十一日 覚 (津出荷物并間役・面役銀取立方ニ付) 鯁ケ沢・青森沖横目所宛

〔国日記〕寛文五年三月二十四日の条

一、三浦専右衛門・九戸市郎左衛門青森沖横目ニ指遣候ニ付、定書相渡、

四三 寛文五年三月二十一日 覚 (内真辺山沖之口出材木改并津出荷物・間役・面役銀取立方ニ付) 内真辺・

三馬屋沖横目宛

〔国日記〕寛文五年三月二十四日の条

一、阿部五左衛門内真辺沖御横目ニ指遣候ニ付而、定書一通相渡、

四四 寛文五年三月二十五日 覚 (諸材木仕出方御山奉行取締リニ付) 今別高与三右衛門・十三富士久右衛門宛

〔国日記〕寛文五年三月二十五日の条

一、今別へハ与頭高与三右衛門、十三へハ与頭富士久右衛門申付、御山之様子諸事御横目ニ誓紙申付遣ス、

四五 寛文五年十月六日 覚 (郡奉行地方支配勤方ニ付) 御郡奉行竹森弥大夫・北村与左衛門宛

四六 寛文五年十月六日 覚 (町奉行町方支配勤方ニ付) 御町奉行富士甚左衛門宛

四七 寛文五年十月六日 寛 (勘定奉行勘定方勤方ニ付) 御勘定奉行三浦助左衛門・藤堂次左衛門・長牛小  
兵衛宛

四八 寛文五年十月六日 寛 (与頭并惣小知行支配勤方ニ付) 小知行頭関伝右衛門・浅利猪左衛門・今勘右  
衛門宛

〔国日記〕 寛文五年十月六日の条

一、御役向之書付、御郡奉行・御町奉行・御勘定奉行・小知行頭一通宛相渡、

〔封内事実秘苑〕 寛文五年十月六日の条

郡奉行北村与左衛門・竹森弥太夫江御条目、北村弥右衛門・渡辺次太夫・傍島九郎左衛門殿三人を以被仰出之、

四九 寛文五年十月 定 (御番所御仕置并勤方ニ付)

〔国日記〕 寛文五年十月二十一日の条

一、北ノ御丸御定書之通、丸瀬与左衛門ニ申渡シ、則御壁書相渡ス、

(参考)

五四 寛文五年極月七日 御家中衆幼少之内出銀之事 御勘定奉行衆宛

〔封内事実秘苑〕 寛文五年十二月七日の条

御家中之族幼少ニ而御役等不相勤候内、開地高百石ニ付銀子貳百二十五匁ツ、年々出銀被仰付、但山作代銀も合  
銀之義は右出銀之内江入、差引之旨共北村弥右衛門殿・渡辺次太夫殿・傍島九郎左衛門殿より御勘定奉行中江被

仰付之由、

五七 寛文六年二月二十六日 進藤庄兵衛・一町田八郎右衛門被仰付御用方之覚

〔国日記〕 寛文六年二月二十六日の条

一、進藤庄兵衛・一町田八郎右衛門ニ御鷹方・御馬方・御茶湯方・同朋共ニ、御台所方・殺生方支配可仕旨被仰付、御礼被申上ル、

五八 寛文六年三月十二日 被仰出之覚（諸勤方ニ付） 御用所・御寄合所宛

〔国日記〕 寛文六年三月十日の条

一、兼而被仰出候条目之趣無間断可被相守候組有之衆ハ、組中へも可被申付由、御家中衆へ廻状三通、御郡奉行へハ御代官中へ申渡在之、肝煎五人与へも可被申付由、御町奉行へハ御町中へ可被申付由、進藤庄兵衛并御勘定奉行・青森・鯉ヶ沢詰番・小知行頭へ申渡、但何も口上之覚と書出し可被相守と書付品々書之訖、

五九 寛文六年三月十二日 覚（城門出入之儀） 御用所・御寄合所并各御門御番所宛

〔国日記〕 寛文六年三月十日の条

一、御三之御門より内へ不寄他国人何人ニ入申儀、無用ニ可〔仕<sup>（威礼）</sup>カ〕旨被仰出候間、堅其旨可被相守候、為其如此候由、御三之丸中計此趣書付ニて相不達させ候畢、



七一 寛文七年閏二月二十三日 寛 （浦々船出入面役赦免ニ付） 内真辺・中師他六ヶ所沖御横目宛

七二 寛文七年三月十三日 寛 （浦々船出入面役赦免ニ付） 鰺ヶ沢・深浦常詰衆・沖御横目衆宛

七三 寛文七年三月十三日 寛 （浦々船出入面役赦免并狄船・釘付船人改ニ付） 青森常詰衆・沖御横目衆宛

〔国日記〕 寛文七年閏二月二十日の条

一、青森沖御横目 木村九郎右衛門・清野与左衛門、内真辺沖御横目 新岡久右衛門・高屋仁兵衛

一、中師沖御横目 和田太左衛門・郷館長介、平館沖御横目 吉崎権右衛門・伴甚左衛門

一、三馬屋沖御横目 櫛引万兵衛・八木橋津右衛門、十三沖御横目 田山藤左衛門・福士甚十郎

一、小泊沖御横目 福士太左衛門・工藤伝右衛門、鰺ヶ沢沖御横目 外崎嘉右衛門・布川市郎左衛門

一、深浦沖御横目 佐藤市右衛門・岡吉右衛門、金井ヶ沢沖御横目 小山平内兵衛・坂本仁左衛門

一、鰺ヶ沢御蔵横目 大田市助・白戸松左衛門、鰺ヶ沢御蔵奉行 木村与右衛門・釜范惣左衛門

右何も夫々ニ申渡、則御役所ニて之定書、先年之書付用相渡、誓詞も申付ル、

七八 寛文八年正月十八日 御家中江新地被下候地所御定之覚 北村与左衛門・岡文左衛門宛

〔国日記〕 寛文八年正月十八日の条

一、御家中へ新地被下所御定之覚、原子より下広須御派之外、さくミ御派之下、右之通新地書上ヶ請取可有候由、御郡奉行へ申渡ス、

七九 寛文八年 覚 （御作事場惣目付被仰付ニ付勤方之儀） 吉岡角右衛門・神五右衛門宛

〔国日記〕寛文八年正月二十日の条

一、吉岡角右衛門・神五右衛門かため申付ル、

「国日記」の条文は、直接御定書の内容を示唆するものではないが、逆に御定書から「国日記」の当該条の内容を類推する手掛かりを与えるものといえよう。

（参考）

八八 寛文九年三月十一日 覚（鯨ヶ沢・深浦両所口燈明之義） 牧只右衛門・須藤惣右衛門宛

〔封内事実秘苑〕寛文九年三月十一日の条

鯨ヶ沢・深浦濶口燈明之儀、為廻船従公義被仰付、四月朔日より十月朔日迄毎夜燈明立、風雨之節ハ念を入候様、問屋共仲間として一夜代り人足出し可申、油之義は一夜三合積若又薪を焚申事在之候共、造用ハ従公義被下候間、無間断念入候様被仰付候旨、牧只右衛門・須藤惣右衛門申渡候、

- 一一四 寛文十年五月二日 覚（城中御門出入改并勤方ニ付） 御武者屯御番所・御目付方宛
- 一一五 寛文十年五月二日 覚（城中御門出入改并勤方ニ付） 大手御門番・御目付宛
- 一一六 寛文十年五月二日 覚（御門廻掃除并警衛方ニ付） 二之丸東南・三之丸東西南北御門番宛
- 一一八 寛文十年五月二日 覚（御門出入改方并城内諸勤仕ニ付） 武者屯御番所・御目付方宛
- 一一九 寛文十年五月二日 覚（御門番勤方并裏御門出入ニ付） 御玄関前御門番・武者屯御番所宛
- 一二〇 寛文十年五月二日 覚（二之丸御門出入改方并諸勤仕ニ付） 二之丸御門宛

一二一 寛文十年五月二日 覚 (御門出入改方并諸勤仕ニ付) 二之御丸東御門宛

一二二 寛文十年五月二日 覚 (三之丸御門出入改方并諸勤仕ニ付) 三之御丸東西南北御門宛

〔国日記〕 寛文十年五月二日の条

一、所々御門御番所之規式書付ニて八組之小頭へ寄合場ニて申渡ス、則御番所々へ書付遣ス、

一二七 寛文十年五月 覚 (御鷹野場内諸鳥捕獲停止ニ付)

〔国日記〕 寛文十年五月十日の条

一、東ハ平川切、西ハ葛原切、南ハ大和沢・相馬切、北ハ高杉大川切、兼而被仰出候通、右之場ニ而諸鳥取候儀、御法度ニ候間、下々へも急度被申付、堅相守候様ニ御組中支配中へ可被申渡候、

一二五 寛文十年六月十一日 覚 (笠着用ニ付)

一二六 寛文十年六月十一日 覚 (忌明御目見方ニ付)

〔国日記〕 寛文十年六月十一日の条

一、病氣忌明断其頭其支配品々、又御本丸より御三之郭迄かさ着候定ケ条書、先今日は喜左衛門・玄蕃・八兵衛へ申渡ス、

一三五 寛文十一年正月十一日 定 (御百姓御米納払ニ付) 三世寺・高杉御蔵奉行宛

一三六 寛文十一年正月十一日 定 (御百姓御米納払ニ付) 板屋野木御蔵奉行宛

〔国日記〕寛文十一年正月二十一日の条

一、三世寺・板屋野木・高杉三ヶ所之御蔵奉行へケ条書一通宛相渡ス、其紙面にて可相勤由申渡ス、

一四一 寛文十一年三月十二日 覚 （新百姓仕立無用之儀并ニ開墾立増米制限ニ付） 御郡奉行宛

〔国日記〕寛文十一年三月十二日の条

一、在々御蔵御百姓仕立候儀、無用ニ可仕せ由御郡奉行へ申渡ス、

一六五 延宝貳年七月二日 覚 （御施餓鬼被仰付候ニ付御賄雑用銀等差配方申渡）

〔国日記〕延宝二年七月五日の条

一、於革秀寺ニ昨晚より今日迄如例年御セかき勤之、自今以後御賄雑用ハ銀詰ニ相究、戸田七郎兵衛ニ積セ銀子  
ニて同寺へ渡ス、右之外御布施ハ前々の通りニ被遣候、当年ハ依之故御賄人申付候、以来不申付候、革秀寺へ  
ハ御廟參不被遊候、

一六六 延宝貳年八月十日 駒改之覚 馬之子改与頭宛

〔国日記〕延宝二年八月十日の条

一、毎年之通在々馬之子改ニ小知行組頭八人、四人組ニ仕指遣ス、則誓紙も相勤ル、委細書付一通宛相渡ス、

一六七 延宝二年十月二十一日 定 （御厩勤方之儀ニ付）

〔国日記〕延宝二年十月二十一日の条

一、木立平左衛門ニ御渡し被遊候御条目を平左衛門并御馬取之小頭・御馬取迄不残、添田儀左衛門読之、申渡ス、

一六八 延宝二年霜月十五日 覚 (御馬屋出入改方并勤方ニ付) 添田儀左衛門・山中六左衛門・二之御郭腰懸  
新御番所宛

〔国日記〕延宝二年十一月十四日の条

一、二之御郭御腰かけ足輕番所江ケ条書張り置、又一紙ハ添田儀左衛門・山中六左衛門江渡ス、

一六九 延宝貳年十二月十日 覚 (御番所改方并勤方ニ付) 杉山勘左衛門前辻番所宛

一七〇 延宝貳年十二月十日 覚 (御藏前御番所勤方ニ付) 御藏前辻番所宛

〔国日記〕延宝二年十二月十日の条

一、杉山勘左衛門前辻番所江之ケ条書并御藏之前江之ケ条書共二二通、久保田一郎左衛門ニ渡之、ケ条書ハ帳ニ  
載置候、

一七二 延宝三年正月晦日 定 (御用勤方御日記并御記録方ニ付) 工藤次兵衛宛

〔国日記〕延宝三年正月晦日の条

一、工藤次兵衛儀、御日記役之誓紙於寄合場ニ相勤、誓詞宛所御目付〔<sup>破題</sup>〕田七郎兵衛・秋本清太左衛門兩人也、  
出座も同断、

〔封内事実秘苑〕延宝三年正月二十六日の条

一、工藤次兵衛初而御日記役被仰付、進藤庄兵衛殿・北村弥右衛門殿より御日記之義御条目御渡被成候、このほか、「津輕編覽日記」三（弘前図書館蔵八木橋文庫）延宝三年正月二十六日の条には、

一、正月二十六日、御日記役初而被仰付候、御手廻り工藤治兵衛、

とあり、日記役の設置を「封内事実秘苑」と同日の延宝三年正月二十六日に置いている。

一七四 延宝三年二月九日 覚（金銀銅惣御山奉行任命ニ付）唐牛与右衛門宛

〔国日記〕延宝三年二月六日の条

一、唐牛与右衛門儀、銅山奉行被仰付旨申渡之後、御前江被召出之、

一七七 延宝三年二月十日 定（御軍用金并廻米之儀ニ付）御郡奉行・御町奉行中宛

〔国日記〕延宝三年二月七日の条

一、岡文左衛門・牧只右衛門・荒屋縫殿丞・油布庄左衛門・唐牛甚右衛門御軍用銀被預置之、

一七九 延宝三年二月十一日 覚（支配方諸事勤方之儀ニ付）北村内記・棟方十左衛門宛

〔国日記〕延宝三年二月九日の条

一、（前略）右之後北村内記・棟方十左衛門被召出、支配方御預之誓詞同断、

一八〇 延宝三年二月十四日 御足輕御番所ニ而下場之覚 御目付方・御物頭宛

〔国日記〕延宝三年二月十四日の条

一、内記・十左衛門江諸御番所にて下場可仕旨被仰出之、即使々江申渡之、

一八二 延宝三年二月二十三日 定 (青森・鰯ヶ沢固役銀納方并出役銀両替方ニ付) 御金蔵奉行清野与左衛門・成田左助宛

〔国日記〕延宝三年二月十九日の条

一、鰯ヶ沢・青森両所間役圍役御判紙

右両所之役銀両替之儀、小判払底高直之節ハ御軍用金五十七両二分五厘之積にて為替に仕可申旨、御金奉行江以書付申渡之、

一八八 延宝三年三月十一日 覚 (御家中諸士衣類着用之儀ニ付)

〔国日記〕延宝三年三月十二日の条

一、衣類御制禁之御条目被為出之、則日夫々江令下知之、

「江戸日記」との対比 (第1表 B主として江戸日記との比較を参照のこと)

一〇 寛文十二年四月二十四日 覚 (御留守中警固并御勤方ニ付申渡)

一一 寛文十二年四月二十八日 覚 (御留守中奥方出入改方并諸規式ニ付申渡)

一二 寛文十二年四月二十八日 定 (御番之者警固方ニ付申渡)

一三 寛文十二年四月二十八日 定 (御留守中御門出入并御留守居役勤方ニ付申渡)

一四 寛文十二年四月二十八日 定 (御広間番勤方ニ付)

一五 寛文十二年四月二十八日 寛 (御留守中御番所勤方ニ付)

一六 寛文十二年四月二十八日 定 (御留守中御門出入改方ニ付)

〔江戸日記〕寛文十二年四月二十八日の条

一、御留守中罷有候諸士江御条目ニテ御作法之儀被仰渡、并当年御供ニテ罷下候諸士江も道中御作法之儀、是又御条目ニテ喜左衛門・九郎左衛門出座中の間ニテ申渡、

二三 延宝四年四月二十三日 寛 (御留守中可相守条々申渡)

二四 延宝四年四月二十三日 定 (御留守中警固并御勤方ニ付)

二五 延宝四年四月二十三日 定 (御留守中御広敷之者勤方ニ付)

二六 延宝四年四月二十三日 定 (御留守中御番之儀勤方ニ付)

二七 延宝四年四月二十三日 定 (御留守中御門出入改方ニ付)

〔江戸日記〕延宝四年四月二十四日の条

一、御留守罷有候諸事諸士御料理上之間江被召出、則御出被遊、御直御留守中万事之儀被仰渡、御入被遊以後、諸事御法度書、松岡新兵衛読之、右終而御供ニテ罷下候諸士被召出、御出被遊、御直道中御法度之趣被仰渡、御入被遊以後御法度書松岡新兵衛読之、



御条目との対比 (第1表 C御条目との比較を参照のこと)

四、寛文八年四月十六日 評定場之覺

〔国日記〕寛文八年四月十五日の条

一、寄合場之事烈座之者・当用之者、脇指押所口々警固足輕之事、番人之事、諸事作法之儀、

六、寛文十年十月十六日 定 (御留守中本城御門出入改二付)

〔国日記〕寛文十年十月十七日の条

一、於御居間御直ニ被仰渡、衆中喜左衛門・八兵衛、終而玄蕃・隼人・帶刀・主馬・左門・平八、終而庄兵衛・八郎右衛門・勘左衛門・内記、終而次郎市・十左衛門・藤九郎、右ハ御留主中御条目可相守旨、次武芸学問可仕旨被仰付、

一〇 延宝四年四月二十三日 条々 (信政家中法度)

〔江戸日記〕延宝四年四月二十四日の条

一、御留守罷有候諸事諸士御料理上之間江被召出、則御出被遊、御直御留守中万事之儀被仰渡、御入被遊以後、諸事御法度書、松岡新兵衛読之、右終而御供ニて罷下候諸士被召出、御出被遊、御直道中御法度之趣被仰渡、御入被遊以後、御法度書松岡新兵衛読之、

一一 延宝五年三月十一日 条々 (城代并家中留守中勤方ニ付信政法度)

〔国日記〕延宝五年三月十一日の条

一、於御詰座敷高倉平右衛門・北村内記・棟方十左衛門、御旗奉行・御鍵奉行・御物頭・御物奉行・御普請奉行・御作事奉行・惣御手廻・喜利支丹改役人・吟味役人相詰、御出、御留主中御条目読聞せ候得と被仰出、御入之後、長内善兵衛読之、

前章の「①国日記との比較」において若干ふれたごとく、「国日記」を記録していく過程で御日記方が御定書を収録していたと推定される「大帳」を参考にしていたことが知られ、両者の関連は自ずから深いものがある。御定書の成立年が正確には何年であるのかその点は不明であるが、「国日記」の付け込みとほぼ同時進行的に、発令された御定書の「大帳」への記録もなされた可能性が強い。右の対比においても明らかな通り、「国日記」にあつては御定書は「ケ条書」、「御条目」、「御壁書」、「定書」、「書付」などと記され、なかでも「ケ条書」のケースがきわめて多いことから、当時御定書は、一般的には「ケ条書」と呼ばれていたようである。それに加えて但書きとして「ひかへ有」の文言がほとんどの関係記事に付されているのも注目され、「国日記」の記録は御定書原本を照合してなされたことが推測される。言いかえると、御定書を収録した「大帳」に記録される以前の、「ケ条書」御定書原本を参照して、日記方が「国日記」に直接記録したことを想像させる。

さて御定書と「国日記」ならびに「江戸日記」との対比において、古文書学的な関心からもっとも注意を喚起されるのは、御定書の発令日時と津輕藩における公式記録である藩庁日記の記録の日付との間に相違があることである。いわゆる文書と記録との問題にかかわることである。普通、記録の日付は文書の日付と同日か、もしくはそれよりも遅れるのが一般的である。ところが右の「国日記」との対比にみるように、御定書第二二・二三・二四・五八・五九・

七一・七二・七三・一六八・一七四・一七七・一七九・一八二号の如く「国日記」の記録の方が御定書の発令時期よりも早い事例が存在した。各御定書の内容や発給の時期などそのケースは一樣ではないので、軽々な結論をくだすのは差控えなくてはならない。私見ではあるが、「国日記」に記されているこれらの日付はあくまでも御定書が作成された日付なのであって、一方御定書の日付は発給が公式におこなわれた日付ではないか、という解釈はいかがであろうか。もしくは、実際の各役職に任命された藩士または役職にある者に内示程度のものであるとして示達したのが「国日記」にある日付で、御定書に記されている日付は正式に領内へ布達した日とも推察される。いずれにせよ、従来古文書学・近世史料論のなかでは論述されてこなかった事例であること(10)から、これ以上の類推はいたずらに誤解を生じさせかねないのでここで止めておくことにしたい。

右に述べた問題に関連して、御定書と「国日記」の日付に多々相違のあることが判明したが、これは今後の津軽近世史研究の上で多くの問題を残すことになった。それは「国日記」の日付をもってその間の歴史事実の発生の日と、広く認められてきたからである。本稿では少なくとも右記の論述からすれば御定書に関する日付は、作成・発給などいろいろな角度から検討してみても、「国日記」にのみ依拠するのはきわめて危険であることが確認された。

このほか「国日記」と御定書の対比において気の付いた点を述べると、九号の御定書の対比の項でも触れたが、御定書の全体に関する関係記事を「国日記」は必ずしも載せているわけではなく、そのなかのごく一部分を記録するに止めていることであつた。類似したものとしては、一六五号の御定書にあつては革秀寺・長勝寺・報恩時・貞昌寺・誓願寺の五ヶ寺に対して施餓鬼の賄銀の覚書を発令したにもかかわらず、「国日記」の記載にあつては、革秀寺へのみの示達となっている。七九号の御定書にあつては、「国日記」に關係する記事がないにもかかわらず、御定書の内容から任命された役職が判明するケースもある（この場合は、吉岡角左衛門・神五右衛門が任命された役職が、御作事場

惣目付であることが御定書から知られる。しかもこの七九号の御定書は寛文八年とのみあって、月日の記述が見当たらない。このような事例はほかにもあり、四九・一一七号の御定書にあつても日付の記述がない。しかし幸いなことに「国日記」に当該の御定書に関する関係記事が記載されているため、四九号にあつては寛文五年十月二十一日に、七九号にあつては寛文八年の正月二十日前後に、一一七号においては、寛文十年五月十日に当該御定書が発給されたことが明らかになった。

「江戸日記」との対比においては、勤方に関する御定書は一度に数多く出されており、これが国元の御定書の発給とやや相違する点であろう。これは江戸屋敷の勤方に、なかでも藩主が国元に帰国後の留守中の勤方に関するものが大部分であることから、区々にならないよう一斉に示達して勤方の徹底を図ったものと推察される。御条目においても同様に勤方の定が多く、とくに国元のそれが目につく。

## むすび

以上四章にわたって、「津輕家御定書」の全体的な検討、御定書と津輕藩の代表的な各史料との比較、続いて近世前期藩政史料として代表的な津輕藩の藩庁日記である「国日記」ならびに「江戸日記」との詳細な比較対照をおこなってきた。本章ではむすびとして、これまで論じてきた事柄をまとめ、今後の検討課題を提示することにした。

さて御定書については、次に指摘する何点かにまとめることが可能であろう。

第一点として、御定書は内容の面からいえば、城中・留守方・警衛などを含む規定を根幹とした、勤方の訓令を大きな柱とし、領内支配全体にわたる行政関係文書を集成したものといえよう。また年代別の収録状況をみるならば、

寛文四・五・六・十年、延宝三年に集中的に発給がなされた。しかしその内容を子細にみるならば、浦方・山方・勘定方などの御定書は寛文四・五・六・九年に大方のものが出されておき、逆に勤方に関する御定書は寛文十年をピークとしてその後順次発令された。これは、第二章において述べたごとく寛文九年に勃発した寛文蝦夷蜂起事件が、決定的な影響を与えたのではないかと考えられる。すなわち浦方など藩財政にかかわる御定書は、概ね寛文蝦夷蜂起事件の直前までに発給されたと思えよう。この観点からするならば、津輕藩における地方支配・浦方支配・山方支配・町方支配は、ある一定の枠組みが当該の時期に一応の形をととのえたことを示唆するものと考えられる。

江戸屋敷の御定書は、江戸における上屋敷の勤方に関するものがほとんどを占め、寛文・延宝期にあつて、津輕藩江戸屋敷の勤方の大要が決められていたのであろう。「江戸日記」との関わりについては、第二章で述べた通りである。

第二の点は、「国日記」における御定書の収載状況をみてみるに、御定書全文が「国日記」に掲載された場合、「大帳二有」とあることから、御定書を収録した「国日記」とは異なる、「大帳」と称されていた別帳の存在していたことが確認された。寛文五年以降全文を掲載することがきわめてまれになると、「国日記」を付け込む日記方役人は、発令直前の御定書を直接閲覧して日記に記録するようになるが、その際「ひかへ有」という但書きを文末に付しており、これは控もしくは案文が残され「国日記」に登載されたあと、恐らく「大帳」に改めて付け込まれたのであろうと想像されるから、「国日記」の記録と「大帳」への付込みは時間的に大きな隔たりは余りみられないものと思われる。

第三点は、御定書に関する従来の研究史では特に「御用格」との関連性が強調されていた。これも子細に検討を加えた結果、「御用格」に登載された御定書はわずか一四通に過ぎず、御定書全体の7%にしかならないことから、言わ

れてきたほどの関連性があつたとはとても言えないであろう。ただし「国日記」に収録されていない御定書が「御用格」のなかに散見することがあり、その点では、「御用格」について述べられてきた定義は今後検討の余地が大いにあるといわねばならない。

第四点は、御定書ともつとも関連性の著しいことが確認された「国日記」には、御定書はさまざまな呼称で表現され、なかでも「ケ条書」のそれが一番多かつた。当時御定書はそうのように一般的に呼ばれていたのであろう。第三章において既に述べたことであるので繰返すことはしないが、御定書の日付と藩庁日記にみえる日付の相違は、従来の古文書学、近世史料論にあつて常識的に通用してきた記録と文書の概念に疑問もしくは再検討を要請する事柄であつた。これについては、今後の課題として性急な結論を下すのは差控えることにしたい。また御定書と「国日記」は、おたがいに別物として取扱うのではなく、本稿でも検証した通り、史料の年代考証、内容の補完など津軽近世史研究においては相補う側面が多々存在することもあるので、両者を積極的につきあわせて用いることが肝要である。

以上四点にわたるまとめと課題の提示をおこなつた。

最後に日記役の創設について記している「国日記」（延宝三年正月晦日の条）の当該事項の箇所で、注目すべき事柄がある。日記方に任命された工藤次兵衛が寄合場において誓詞を提出した宛所が目付であつた。日記役職掌を定めた御定書第一七二号のなかに目付の関わること、また目付が監督に当たるべきことはとくに規定されておらず、この部分は「国日記」でなくてはわからないところであつた。それに加えて、「国日記」延宝二年十月二十九日の条に、「日記来月朔日より、御目付中立会付ケさせ可申由申渡之」とあつて、日記の付け込みは目付の立会いのもとに実施されることになった。時期は若干くだるが、江戸幕府においても幕府日記の記事作成に関して、目付の介在が確認され、幕藩体制においては公式の記録として公務日記に登載する場合には、目付をなんらかの形で介在させるシステムを採

用していることに我々は注意しなくてはならない。

ついで前述の御定書一七二号に、日記役が藩庁日記に記すべきこととして、何点が規定されていたが、御用勤めの記事は細大漏らさず、「治乱共」に記し、將軍家への「御献上物」や「老中」への「付届」「進物」、「御公儀」むきの諸事などを必ず記載し、「以来迄御用相立候様」に記録すべきことが定められた。すなわち記録役が恣意的に書類を取捨選択して付け込んだ結果、公務日記が成立するのではなく、将来有用な素材となる国家的な記録として、さらには正史編纂の材料として伝存させようとする意図のもとに、目付の吟味を経た記録がなされるということであった。換言すれば日々の公式な記録、それに基づく正統な歴史の編纂は、国家的な事業と考えられていたことによるものと推察されるのである。

## 註

(1) 本稿で主として取り上げる「津輕家御定書」と内容的に類似した史料として、景浦勉校訂『松山藩法令集』（近藤出版社 一九七八年）があげられる。右書の解題は比較的充実したもので、校訂にも工夫の跡が伺われる。しかし校訂者が付したと思われる、目次における（一）内の文書名が、同じ被仰渡でも通達であったり、布達・覚書・指令などと区々であり、混乱がみられたのは残念であった。

近年刊行された『盛岡藩雜書』第一卷（正保元年〜承応三年）（熊谷印刷出版部 一九八六年）は、南部藩藩政史料としてまことに重要なものであつて、北奥近世史研究に大いに寄与するものと期待される。このような形で広く研究者の利用に供されるようになったことは、学界の財産を確実に増やしたことを意味するので、校閲・発刊に携つた関係者各位の労を多としたい。膨大な藩庁日記を活字化したのは全国的にみても余り例がなく、その点からも右の事業は大いに評価されてよいものである。惜しむらくは全国に先駆けておこなった仕事として、当該史料の解題（残念ながら二頁分しか見当たらなかった）に物足りなさを感じたのは、筆者のみではあるまい。解題をもっと充実してほしかった。今後長期にわたって刊行計画が組まれている由なので、その点の配慮を校閲者ならびに校訂者に望みたい。

(2) 例えば、拙稿「津輕藩藩政文書の基礎的研究（一）」近世前期藩政文書を中心に——（『文経論叢』第十五巻第一号 一九八

○年)、拙稿「津軽藩藩政文書の基礎的研究(二)―拙稿(一)の補訂と新文書の研究―」(『文経論叢』第二十卷第三号 一九八五年)がある。ただし両者とも藩政史料といっても文書を中心に考察をしていることからいわゆる記録類の考証をおこなったものではない。今後、古文書学の大きなテーマである文書と記録について、古代・中世ばかりでなく近世史研究においても根本的な検討が加えられなくてはならない時期が到来すると考える。このような状況のなかで、藩庁日記と文書との関係を考証したものと、筆者は、拙稿「藩政史料における文書と記録」(『日本歴史』第四六〇号 一九八六年)を発表し、藩庁日記の記事の成立に至る過程を明らかにし、問題点を提示した。

(3) 藩庁日記については、従来の近世史研究のなかでいかなる研究がなされてきたであろうか。斎木一馬氏の論文「江戸時代の日記」(『国史学』第百号 一九七六年)によれば、公家などの日記についてはかなりのスペースがさかれているのに対して、藩庁日記に関しては、「幕府日記と同じく、全国諸藩にはまたそれぞれ膨大な藩庁日記があり、今日伝存するもの甚だ豊富で、今その多くは、旧藩庁所在地の県立あるいは市立図書館等に蔵せられている。但しそれらについては、調査が十分でないのここに掲げることができない。」(同誌八一頁)と述べるにとどまり、現状ではほとんど基礎的な調査にすら着手されていないことを明らかにしている。

一九七九年に刊行された『日本古文書学講座』6近世編1(雄山閣出版)二二三―二二四頁には、藩庁の公務日記と題して斎木氏の論文よりは充実した内容が披露されているが、藩政史研究に携っているものにとつては、いずれも常識的な言及で本稿で述べたような論点はとくに問題とされていない。

なお近刊の『北からの日本史』(三省堂 一九八八年)に榎森進氏が「研究史の整理と課題」と題して、北海道・東北史研究をめぐって整理しているが、日本北方地域史における史料学的研究についての言及は見当たらず、当該地域におけるこの方面の研究蓄積が如何に乏しいものであるのかを物語っている。

(4) ちなみに筆者が同誌において述べた関係部分(九六頁)を、参考のため次に掲げておく。

ここで本書について二・三の気のついた点を挙げておく。第一には、本御定書は国立史料館に所蔵されている幾種類かの御定書の中で、いずれの史料を採用したのか、凡例・解題双方に触れられておらず、せめて使用本の図書番号を明記して欲しかった。第二には、解題文中に於て若干の誤解を生じさせる文言があることである。例えば、弘前図書館の「御用格」を「最も完備した法典である」と表現しているが、これは該史料への無用の誤解を与える基いである。「御用格」についての詳細は現物を見てもらうか、もしくは「郷土史文献解題」(弘前図書館 昭和四五年)を一読されれば、「法典」ではないことは理解されると思う。右の外、本書と「御定法編年録」と関係については、筆者が実際比較校合した結果、解題の表記とは相違する点のあったことも付け加えておく。



(5) 津輕藩の江戸屋敷については、あまり研究の蓄積がない。概略的に述べると、同藩の江戸屋敷は上・中・下に分かれ、当初、上屋敷は神田小川町に所在した。明暦三年（一六五七）正月の「新添江戸之図」（筆者所有のコロタイプ判）——いわゆる明暦の大火直前の江戸図で、江戸を焼亡しつくした明暦の大火後、大幅な町の改造が実施されたことから、この絵図は江戸幕府創立時の江戸の状況を良く伝えているものとして有名である——にも神田に津輕越中の屋敷が描かれている。貞享四年（一六八七）の四代藩主津輕信政閉門事件により、翌元禄元年七月に神田から本所二ツ目に上屋敷を移転させられた（『津輕歴代記類』）。この後、維新に至るまで上屋敷の移転はなかった。「天保武鑑」（『国郡全図並大名武鑑』）人文社 一九六七年）によれば、十代藩主津輕信順の時期に上屋敷は本所二ツ目、中屋敷は品川戸村・本所三ツ目、下屋敷は大川端・亀戸であった。

最近刊の『江戸復原図』（東京都教育委員会 一九八九年）によれば、津輕藩の江戸藩邸で、本所二ツ目の上屋敷の付近には伊勢久居藩藤室家の下屋敷が、本所三ツ目の中屋敷の付近には豊後杵築藩能美松平家の下屋敷があり、大川端の下屋敷には越前勝山藩小笠原と丹波亀山藩松平両家の下屋敷が隣接していた。

(6) 寛文蝦夷蜂起事件に関しては、最近研究に厚みが出てきており、代表的な論稿としては、海保碩夫「シャクシャインの戦い」（『近世蝦夷地成立史の研究』第五章 三一書房 一九八四年）、菊池勇夫「寛文期「蝦夷蜂起」と幕府権力の動向」（『幕藩体制と蝦夷地』第三章 雄山閣出版 一九八四年）、榎森進「アイヌの歴史」（三省堂 一九八七年）が、当該事件に対する津輕藩側の対応としては、拙稿「東北諸大名と蝦夷地」（『海保碩夫編「北海道の研究」』4 近世篇II 清文堂 一九八二年）、浪川健治「藩政の展開と国家意識の形成」（『日本史研究』第二三七号 一九八二年）、等がある。

(7) 津輕藩では、本文で述べたような家臣団の引締めを実施する一方で、蝦夷地へ出兵した家臣に対して積極的な褒賞をおこなった。『国日記』寛文九年十一月十日の条によると、蝦夷地に派遣された杉山八兵衛ひきいる津輕藩の家臣達は同月七日に帰国し、同月十日には杉山八兵衛が弘前城において藩主に目見え慰勞されている。ついで同月十五日には出兵しなかった重臣北村弥右衛門・渡辺次大夫等が蝦夷蜂起につき「万方骨折」とのことで褒美が下され、同様の例は、同月十九日・同月二十三日にも見られた。出兵者達への褒賞は、同年十二月十二日・同月十八日・同月二十三日、翌年の六月四日・九月十四日・同月十五日・十月朔日・同月十五日におこなわれた（いずれも『国日記』の当該日の条による）。

また福井敏隆氏によれば、寛文蝦夷蜂起事件が一つの契機となって、津輕藩の番方組織の整備が実施に移されたという（長谷川成一編『津輕藩の基礎的研究』二二四・二二五頁 国書刊行会 一九八四年）。

(8) 例えば、「延宝七年大組頭支配七組分御役人足出帳」（弘前図書館蔵）に見るように、城下弘前の町方における町役は、このような台帳を元に整然と賦課されるようになり、従来の如く藩庁が必要に応じて城下の町方へ町役を適当に賦課することは、この後しなくなった。「延宝七年大組頭支配七組分御役人足出帳」は、長谷川成一編『津輕近世史料』弘前城下史料（上）。

(北方新社 一九八六年)に収録されているので参照されたい。

(9) 日記方の創設については、第四章において延宝三年正月晦日の御定書一七二号の定を対比したところを参照していただければわかることであるが、『国日記』は比較的簡単な記述に終始している。当該御定書によって初めて日記役の、具体的な職掌が判明したといっても過言ではない。

(10) 例えば、代表的なものとしては鈴木寿「近世史料論」(『岩波講座日本歴史』25 岩波書店 一九七六年)、鎌田永吉「近世史料の分類」(『史料館研究紀要』第九号 一九七六年)等があるが、いずれも近世史料の分類論ないしは分類にあたっての原理など理論的な方向に偏っている。これは近世史研究が近世以前の時代と違って膨大な分量を整理することから出発しなければならぬ、いわば宿命的な性格を有することに起因するものと考えられる。

(11) 『大日本近世史料 幕府書物方日記』十三 元文二年(東京大学出版会 一九七八年)元文二年五月二十四日の条に、老中からの順達された御触書として、「組支配之事、御日記二可記義有之節、御目付・大目付江書付可出由之御触書也、」とあって、組支配の事で幕府日記に記録すべきことがあれば大目付や目付に届けるようにと令達されている。この点については、『東京大学史料編纂所報』第一三号(一九七八年)の三四頁に、右筆方で作成された幕府『御日記』の作成過程の一資料となる記事である、と注意が喚起されている。

(一九八六年三月二十五日成稿)  
(一九八九年十二月十五日改稿)

# 〔付記〕

本稿における、江戸藩邸に関する記述は、筆者が「財団法人福武学術振興財団」より受けた、一九八九年度の研究助成金による研究成果の一部である。